

原田孔平

冷や飯喰い 三郎

旗本横紙破り



旗本横紙破り

常州大学
冷々飯喰
書
章
藏

一郎

原田 孔平



学研M文庫

はたもとよこがみやぶ 旗本横紙破り ひ めし ぐ 冷や飯喰い れい ざぶ ろう 伶三郎

はら だ こうへい
原田 孔平



学研M文庫

2011年7月26日 初版発行



発行人—— 脇谷典利

発行所—— 株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元—— 株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本—— 中央精版印刷株式会社

© Kouhei Harada 2011 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは—— 編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・それ以外のこの本に関するお問い合わせは下記まで。

文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『冷や飯喰い伶三郎』係

Tel 03-6431-1002(学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複写権センター TEL 03-3401-2382

Ⓔく日本複写権センター委託出版物

目次

怜三郎の章

5

黒夜叉の章

107

意知の章

235

旗本横紙破り

冷や飯喰い伶三郎

原田 孔平



学研M文庫

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

目次

怜三郎の章

5

黒夜叉の章

107

意知の章

235

怜三郎の章

一

「ごおーん」

捨て鐘を三つ撞いた後、暮れ六つ（午後六時）の鐘が鳴った。

「奥方様、奥方様」

ないとうなおまさ

直参旗本寄合席内藤直政に仕えること三十年、老用人の富岡伊平次が廊下を慌ただしく駆け抜ける。四千石の大身である内藤の屋敷は広く、玄関から駆け上がった伊平次が小走りに二つ目の廊下を曲がったところで、声を聞きつけた主の直政と出くわした。あるじ伊平次が素早く首を振り危険を知らせると、慌てて部屋にもどった直政と入れ違いに奥方の田鶴が姿を現した。

「何ですか、騒がしい」

主とは対照的に、落ち着き払った奥方は伊平次の無作法を咎めると、平伏し

たままの家来を見下ろしながら言った。この屋敷では明らかに奥方の方の格式が高い。というより、主がだらしなすぎた。婿養子の直政には極めて不利な状況が、もう十年以上も続いていたのである。

かつては四千石の旗本に相応しく書院番頭まで務めたのだが、気が弱いため部下を掌握することができず、人間関係に嫌気がさし、ついには病気を理由にお役目を一年以上も休んでしまった。

徳川幕府は比較的病氣理由の欠勤に対しては寛大だが、それでも、丸々一年を休むとお役御免となるのが決まりであった。

三年前に他界した田鶴の母勝江は、この役立たずの婿を詰り続け、御先祖様に詫びながらこの世を去ったという。

「また、娘が参っております」

伊平次の言葉にたちまち田鶴は不快な表情を見せた。

「また伊勢屋の娘が参ったか。あれほど言い含めたのにのう」

先日も今日と同じように、日の暮れるまで屋敷の外をうろついていた伊勢屋の娘を見咎め、屋敷に上げて話をつけたばかりなのであった。

伊勢屋の娘が言うには、怜三郎に唇を吸われ、自分は怜様の嫁になるつもり

だとのことである。嫌悪感を露^{あらわ}にした田鶴であつたが、身分違いは不幸の始まりと、懇々^{こんこん}と諭^{さと}して帰らせた経緯^{いきさつ}があつた。しかも翌日、田鶴は伊勢屋を訪れ、詫びを入れていた。気位の高い田鶴にとって町人に頭を下げることは腸^{はらわた}が煮えくりかえるほど腹立たしいことであつた。

それが蒸し返されたと思つたのだから、不快な顔は当然といえた。

「それが奥方様、今宵の娘は別ものにござります」

伊平次のまさかの答えに、潔癖^{けつぺき}な奥方はたちまち柳眉^{りゅうめい}を逆立てた。

「おのれ、怜三郎、直政殿の淫蕩^{いんとう}なる血をなみなみと受け継ぎおつて。許せぬ、伊平次、怜三郎をここに連れてまいれ」

怒り心頭に発した奥方が躍起となるが、肝心の怜三郎はいないという。

「行方をくらましたか」

一旦は拍子抜けした田鶴だが、それでも怒りを抑えかねるようである。

鼻息を荒くしたままその場をいきつ戻りつしていたが、やがて気が治まったのか、外にいる娘を呼ぶように言った。

連れてこられた娘は伊勢屋の娘とは違い、おとなしそうな娘で、確かに男好きのする顔立ちをしている。

「そなた、怜三郎とはどのような係わりじや」

田鶴は落ち着きを取り戻していた。四十を三つほど超えてはいるが、その気品は周囲を圧倒するものがある。

「私は、今日、怜三郎様に危ういところをお助けいただきました」
娘は意外なことを口にした。

「ん」

思いもよらぬ展開に田鶴と伊平次が顔を見合わせる。聞けば、やくざ者に絡まれ、危うく屋形船に連れ込まれそうになったところへ、居合わせた怜三郎がたちまちのうちにやくざ者を川に投げ込み、助けてくれたという。そのうえ、切れた下駄げたの鼻緒を自らの手拭いを引き裂き、直してくれたというのである。娘が気持ち顔を赤くしているのを訝いぶかしく思ったのか、その話をどこか疑わしうに聞いていた田鶴が小声で尋ねた。

「下駄の鼻緒をすげ替える間、そなたはどうしていた」

田鶴の問い詰めるような言い方に、娘は一層顔を赤らめ、小声になった。

「あの、怜三郎様が膝の上に足を乗せてよいと言われたものですから」
下を向きながら答える娘に、田鶴は頷うなずくと、伊平次の方へ向かって囁ささやいた。

「あ奴の、やりそうなことじゃ」

伊平次もいかにもといった顔で答える。

話を聞き終えると、田鶴は威厳を前面に押し出し、鷹揚おうように言った。

「危ういところであつたのう。何もなくてよかった。礼には及ばぬ。怜三郎も武士として当然のことをしたまでじゃ。そなたも早よう帰るが良い」

娘の思惑など意に介さぬといった調子でさっさと追い返してしまった。

娘が帰ると、田鶴は暫くしばら直政のいる部屋の方を睨みつけていたが、愒氣りんきを病んでいると思われるのを嫌ったか、不機嫌そうに台所へと向かつていった。

伊平次が直政の部屋の前を通りすぎると、片手で拝む真似をしながら直政が顔を出してきた。

「伊平次、永きにわたって我が家を束ねるお前の心遣い、武士は相身あいみ互たがいとはいえ助かったぞ。それにしても怜三郎には困ったものよ。まるで盛りのついた猫じゃ。屋敷に娘が乗り込んでくる度に、身の細る思いをするわしの辛さがわからんのかのう」

首を傾げる直政に、伊平次は窮屈きうくつそうな笑顔で応えるのであった。

二

今川町いまがわちやうにある馬庭まにわねんりゆういさか念流井坂道場は、毎朝五つ（午前八時）を合図に門弟達が集まり始める。

師範代の掛け声に合わせて五百ほど素振りを繰り返した後、竹刀しなひで組立ちをする者、木刀を持って形を練習する者とに分かれる。

道場主の井坂良蔵りようぞうが師範席に着くのは決まってこの頃であった。

鬼瓦おにがわらを思わせる厳いかつい顔。羽織袴姿はおりはかまに加え、真一文字に口を引き締めた厳めしさは、すでに入門したての門人だけにしか通用しなくなっているのだが、気の毒なことに、本人はさほどに気づいてはいない。

性格が優しすぎるのである。

見かけと違って気が弱いせいもあるが、他の道場の規律と比べ、この道場のそれは極めて緩ゆるかった。

のこのこと四つ（午前十時）を過ぎてから顔を出す者がいた。

男は平然とした面持ちで道場に現れると、木刀をさげたまま道場主に軽く会

釈をただけで、素振りを始めた。

まだ若い。二十歳を二つ、三つ超えたばかりであろうが、その態度は半ば傍若無人ともとられかねない。

「びゅっ」

しかし、明らかに他の者達とは素振りの音が違っていた。辺りを切り裂くような鋭い素振りに、周りにいた者達が思わず遠慮するかのように場所を空け始めた。

「怜さん、稽古をお願いします」

同じ年頃の男が親しげに声をかけながら道場の中央へ歩み出てきた。
つきおかしんぼちろう
月岡新八郎といい、北町奉行所の本勤並与力ほんきんなみである。

本来与力は父親が職を辞するまでは見習のはずであるが、新八郎は奉行の計らいで本勤並となっていた。

新八郎の身体からはすでに汗が噴き出していた。

五つに道場へやって来てから、ずっと素振りをしていたようである。ところが、

「新八。おめえも今来たところかい」

その汗を茶化すかのように男は言った。

伝でんぼう法な物言いが、この道場における男の位置取りを表していた。その証拠に二人が稽古を始めると、周りの者は隅の方へと移動し始める。

稽古とはいっても他の門人と違い、二人は木刀を使った。もちろん、本気で打ち込めば命取りになるから寸止めで終わらせるのだが、この二人はかなり腕が立つとみえ、打ち込みが鋭い。しかも道場を所狭しと動き回った。周囲の者が警戒するのも無理からぬことであつた。

道場の稽古は通常四つ半（午前十一時）頃までだが、二人は他の門人達の邪魔になることを知っているので、いつも組立ちは四つ頃からと決まっていた。

怜さんと呼ばれたのは旗本の次男坊で内藤怜三郎。

童顔の割には暴れん坊で、今までに何人も怪我をさせていた。

当人はその都度、血相を変えながら謝るのだが、当然稽古相手には敬遠された。それゆえ最近では新八こと、月岡新八郎のほかには相手になつてくれる者がいなかったのである。

歳は新八郎の方が一つ下だが、はるかに落ち着いてみえる。

父親が勤めを辞めないため、未だ本勤並のままではあるが、槍は相当なもの

で組屋敷内の槍術道場そうじゆつにはすでに相手がいなくてまでいわれていた。

本来与力は槍一筋といわれ、さほど剣術の方には重きを置かない。

にもかかわらずこの道場に通り始めたのは、子供の頃からの喧嘩相手であつた怜三郎が、この道場にいたからである。

与力の子供が旗本の子供と喧嘩をすることなど普通は許されないし、意気地のない旗本の子は大抵親に言いつけたものだが、怜三郎は一切そのようなことはしなかった。

ぼこぼこにされながらも頑がんとして口をつぐみ、翌日になると再び現れ、今度は新八郎をぼこぼこにした。

やがて新八郎が奉行所に無足見習むそくみならいとして通い始めた頃、同じく井坂道場で剣術を習い始めた怜三郎とはしばしば通りで行き違ふことが多くなつてきた。

その都度、にやりと笑いかけてくる怜三郎に、いつしか新八郎は好意を抱くようになつていたのである。

二人の稽古は次第に白熱し、いつしか門弟達は全員固唾かたずを吞んで見守るようになってきた。

そんな激しきは道場の外にも伝わっていた。